

私にも 言わせて! 第77回

地域保健の専門家 「保健師」に期待を寄せて



栃木県南健康福祉センター
副主幹
早川 貴裕

2005年群馬大学卒業(学士編入学)。5年間の臨床経験を経て、10年に京都大学大学院社会健康医学系専攻に進学。公衆衛生学修士を取得後、11年12月栃木県庁に入庁し、18年4月から現職。座右の銘は「精力善用・自他共栄」。

公衆衛生医師になって7年がたちますが、本庁経験が長く、保健所で
の毎日が勉強です。今回は、自分の行政歴を振り返る中で、同僚の保
健師とともに働きながら、また、看護学生等の指導に携わりながら感
じたこと、考えたことについて述べさせていただきますと思います。
皆さまにはこれからも指導、ご鞭撻のほどよろしく願います。

はじめに

私は2011年に栃木県に入職し、本庁健康増進課の一担当者として行政歴をスタートしました。医療や学問の世界と大きく異なる行政の中でやってこられたのは、事務職も含めたくさんの同僚、上司の支えや教えがあったからこそと思います。特に「人を見て、地域を見て、行政の進むべき方向性を考える」という地域保健活動に必要な姿勢を学ぶことができたのは、多くの本庁保健師との関わりがあったからであり、とても感謝しています。

当センターには18年4月から所属

「地域住民との関わりが少ない」「事業が少ない割りに職場にいない」「事務作業をしていることが多い」という率直な感想をよく耳にします。

確かに難病担当は、頻繁な窓口・電話相談に対応しつつ、山のような申請書類を受け付け、それらを処理するために膨大な時間を費やしています。また、精神保健担当では、警察からの通報が重なり、残っている職員がいけないという光景もしばしば見られます。保健師が個々のケースにじっくり関わりたい、あるいは地域に必要な事業についてじっくり考えたいと思っても、目の前の業務に追われ、そうした時間を確保しにくい状況にあることは事実であり、学生はそこを見ているでしょう。

2018年に発生した西日本豪雨や北海道胆振東部地震に、当センターから計3名の保健師が派遣されました。派遣を終えての感想を聞くと、皆さん「被災地の人たちから感謝され、やりがいや保健師活動の意義を感じた」と言っていました。私自身、臨床をする中で患者や家族から感謝された時には、この仕事をしていて良かったと思ったことがたびたびありました。災害派

しており、主に地域包括ケアや地域医療構想に関すること、看護学生等の実習指導等に携わりながら、所長の補佐的な立場で公衆衛生医師の勉強をしています。そのような中でも学生の実習指導は、地域保健について改めて考える良い機会となりました。今回はこれまでの経験や内省を踏まえて、これからの地域保健を担う保健師に期待することについて述べさせていただきますと思います。

自らの足で地域を知る 保健師の力

私が本庁配属中に感じたことは、

遣はかけがえのない経験になるものですし、被災地の人々の役に立っているという実感が達成感につながったことは喜ばしいことですが、裏を返せば、それだけ普段はやりがいを感じにくい環境に置かれているということではないかと思いました。

これからの保健師に必要な経験等

本庁経験のない保健師に尋ねると「本庁には行きたくない」という人が多くいますし、反対に、本庁勤務の保健師が「早くセンターに戻りたい」と言うのを聞くことも少なくありません(正直なところ、私にはそうした感覚がないのですが、それは本庁から行政歴をスタートしたことも関係しているのかもしれない)。その理由の一つとして、保健師の本分は対人支援、地域支援にあると考えているところがあるからではないかと思っています。しかしながら、現実には限られた地域での支援のみでは解決できず、県全体の仕組みが変わらないといけないといった課題がたくさんあります。これからの県全体の保健医療政策の立案・評価やマネジメントに、保健師が地域で培った知識、経験が生

「保健師は皆地域のことをよく知っている」ということです。行政ではしばしば「地域の実情を踏まえて」という表現をしますが、実際に地域のことをつぶさに把握している人はどれだけいるでしょうか。例えば、本県は人口当たりの訪問看護事業所数が全国の中でも少ない県の一つですが、その理由は今もって明らかではありません。最近では少し改善してきているものの、数年前までは事業所の新規開設と廃止が頻繁に繰り返されるといった状況でした。そうした中で同僚の保健師は、事業所の実情や抱える課題を明らかにするため、全事業所を対象にしたアンケート調査を行うことと併せて、率先して各地の事業所を訪問し、直接話を聴いて回っていました。保健師にとって自ら地域に出て現場の声を聴くというのは当たり前前のことかもしれません。けれども、来院する患者を診るという

きることが多々あるはずです。ただ、佐伯¹⁾によると、家庭訪問や問診などの日々の活動の積み重ねと振り返りにより発達する対人支援能力に比べ、抽象度の高いマネジメント能力は経験だけでなく系統的な学習を積み重ねることが必要とされるそうです。そのためにも、保健師には若いうちから本庁経験を積むことをいとわれないでほしいですし、また、それを支えるキャリアラダーの構築に県として取り組む必要があるのではないかと考えています。

また、八田²⁾は、保健師としての活動能力があったとしても、その能力を発揮するためには実践の中で成功体験(失敗を乗り越えることも含めて)を得て自信を付けていく必要があると述べています。しかしながら、世間の目は少しの失敗に對しても厳しくなつてきています。そうした中でさまざまな経験を積み、また、やりがいを感じながら地域保健活動に取り組めるようにするために、保健師自身が自己研鑽に努めるだけでなく、安心して踏み出せる環境やバックアップ体制を組織として確立していくことも重要です。

臨床の受け身の姿勢が身に付いている私にとって、そうした姿は新鮮でした。また、苦勞して把握した地域の情報やニーズは、本庁から眺めているだけでは分からないことばかりですし、何より施策立案の際に明確な根拠になるということに気付くきっかけにもなりました。今は、時間の許す限り地域に出て現場の声を拾うことを第一に心掛けています。地域のことを理解するため、また、地域との関係を築くために自らの足で稼ぐことの重要性について学ぶことができたのは、同僚の保健師たちのおかげです。

やりがいを実感できるか

当センターでは年間70名ほどの学生を受け入れています。実習生に保健所保健師のイメージや役割を尋ねると、「地域の関係者のつなぎ役、調整役」「市町村保健師の活動の支援者」といった模範回答の他に、

地域の保健師が 公衆衛生の中心となるように

全国保健所長会では、これからの公衆衛生に求められることの中に「地域包括ケアの推進」を掲げていますが、目指すところは全世代・全対象型地域包括支援体制の構築です。そこでの対象となる地域のさまざまな主体と関わり、それらをつなげていく上で中心的な役割を果たすのは、地域をよく知る保健師であるべきだと思います。同時に、縦割りの行政組織の橋渡し役を担うこともまた、保健師の重要な役目ではないでしょうか。そうした役割を発揮できるよう公衆衛生医師としてサポートを惜しまないつもりです。保健師の皆さんには、これからの一つ一つのケースの積み重ねを大事にしながら、地域に求められる、また、地域全体に広がる仕事に取り組んでいただくことを強く期待します。

拙い文章を最後までお読みいただきました皆さまに感謝申し上げます。

【引用文献】

- 1)佐伯和子：「保健師ジャーナル」74(3):8-13,2018.
- 2)八田冷子：「保健師ジャーナル」74(1):20-26,2018.